あ つ さ し ら ず

- 植物が本来持つ高温耐性を引き出し、暑さに耐える体質に改善し、健全生育を促す。
- 使い始めは“暑くなる前”から。「育苗期」からなら、一層効果的。

かわらばん 第118号 2020年8月号

高温ストレス緩和剤“あつさしらず”で夏を乗り切る

近年の夏の暑さは厳しさを増しています。
菊つくり上、特に問題となるのは、5～6月の苗つくりの時期に猛暑日がきてしまうことです。
苗半作と言われていますが、苗つくりの時期は極めて重要な時期で、ここで“根つくり”に失敗すれば、真夏での挽回は難しく、取り返しのつかない生育不良に陥ってしまいます。
充分な根つくりができた優良な苗であっても、夏の暑さによる生育不良を回避するのは簡単なことではありません。
木つくりが充分にできないことは秋に期待する花は咲かないことになる為、暑さの問題はきわめて深刻です。

“あつさしらず”で暑さに耐える体質に改善する

最高の肥料と土、そして最高の技術を駆使しないと優秀な花が咲かない
“この暑さだからどうにもならない”で終わらせてしまうことはできない。
そこで“暑さに耐えられる体質”に改善することはできないか、これが可能であるならば多くの愛好会の皆様のお役にたて、楽に、楽しく菊つくりができ、優秀な花を咲かせることができるのではないかと考えました。
“あつさしらず”は、この様な発想の元に開発をいたしました。
植物の歴史をかえり見ると、地球誕生以来の高温期に現れ、低温期を耐え抜き進化を続け、現在に至っています。
よって植物は高温に耐える力を、潜在的に持っていると考えられます。
この潜在的な力を何らかの方法で、刺激することでこの能力を甦らせることができれば、高温に耐える力を呼びもどすことができるのではないかと考えました。
この考え方は菊のみでなく広範囲の植物に有効であるはずです。“あつさしらず”はこうした考え方に立脚し開発した「高温ストレス緩和剤」です。

原材料は“高温に耐えられる特殊な有機物質を多く含む、食歴のある植物より抽出・精製してあり、極めて安心・安全な商品です。

生育の差歴然 暑さに勝つ！

「暑くなったら使う」では効果が遅れる。　早めの使用が効果的。

“あつさしらず”を使えばこんなにちがう!!

対象区は、“あつさしらず”でサシ穂を水上げし、鉢上げ時と2週間後1回使用
肥料は共通。元肥は5号鉢上げ時中段に5～10グラム使用
みらい(かがやき混合)500倍　2回　これはすべて同じです。

生育がこんなにちがう

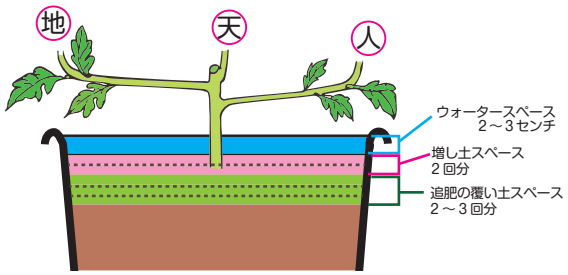
乾燥にも強く、しおれにくい

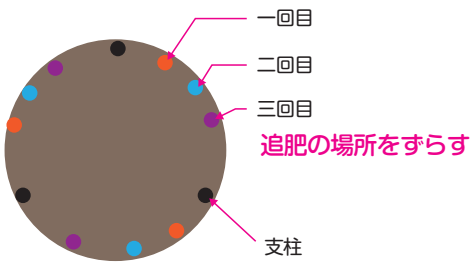
三本立盆養　定植後の管理

乾燥肥料の与え方

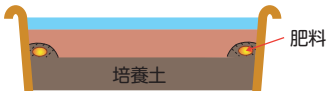
従来は定植時の元肥に 1 合～ 2 合など多量の乾燥肥料を与え、追肥は少量（又は与えない）で済ます愛好家の方が少なからずいました。
しかし、水掛けにより急激に肥料が溶け出し、肥料濃度が（チッ素分）高まり、“根いたみ” を起こしたり “根張が悪化する” などの問題を起こすことがよくあります。特に近年の夏の暑さによりこの様な事故が発生することが非常に多くこの方法はおすすめできません。
この方法で優秀花を咲かせていた方々も近年は止めています。

肥料の置き方





㊟ 乾燥肥料は置いたら必ず土をかぶせる！！

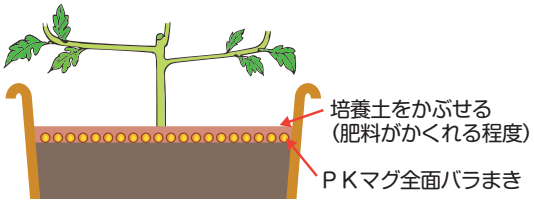


おすすめ肥料

厚物		管物	
菊養源6-6-5	名彩輝	りんのちから	菊養源 3-7-6

※ 液体肥料の上記成分割合に準ずる物
アミノ酸の含有量
（有機質 1 の多い当社製品が最高の結果をもたらします）

「PK マグ」置いたら土をかぶせる



追　肥

規定の量（30～50グラムくらい）を三カ所に分け表土に置き、土をかぶせます。
さらに 2 週間後に同様な方法で追肥をします。
2週間の間隔を目安に与える。理由は山谷を少なく平均的に肥料を効かせる為です。
こうした方法で 2 ～ 3 回肥料を与え、8 月の下旬に止め肥をします。
8月中旬くらいまでは “根つくり” 中心に考え、1 回目の追肥は半分程度とし（又は追肥は少なめ）、追い込み中心の肥料の与え方をする方法もあります。肥料濃度（チッ素）が低い方が根をつくりやすく、根張りがよければ、追い込みに無理がきく利点があります。

※ 定植の時期により追肥 2 回で止め肥、又は追肥 3 回で止め肥となる場合があります。
例　6 月下旬定植の場合…7/15、7/30、8/15、8 月下旬止め肥
　　7 月 10 日定植の場合の追肥…7/25、8/10、8月下旬止め肥

止め肥

最後に置く追肥のことを止め肥と言います。
与え方は追肥と同じ方法で行います。
しかし “生育” の状態により、施肥料の加減をして下さい。
また、置き方も短時間で効果を上げたいなら、全面にバラまいて一気に効かせる方法があります。
さらに一度に与えるのではなくて数回に分け 4 ～ 5 日間隔で少量ずつ「全面バラまき」で与えるなど、状況に応じた施肥方法があってもよいと考えます。
“めざすところは健全かつ充実した木つくりです”

生長過程においてチッ素過剰に陥った場合の対処

生長の過程において「葉色が異常に濃くなった」「葉のフチが波打ってきた」「葉が巻いてきた」などの症状が起きることがあります。“チッ素過多” です。
こんな症状が発生した場合は肥料調整（P.K.マグ使用）を与え、チッ素の消化を促し正常な生育にもどします。
使用するタイミングは見つけたら “即” 全面にバラまき、培養土をかぶせます。（肥料がかくれる程度でよい）
（液体の “P グリーン” ならさらに即効性）

※ 茎葉にチッ素分は余るほど持っているわけですから、このチッ素分の利用を促すことで生育は進みます。（追肥 1 回お休みでもよいかも知れません）（次ページへ ↗）

「Pグリーン」は強力かつ即効性の肥料調整剤です。葉面散布、灌水どちらでも使えます。

さらに速効性を求めるなら
「P. グリーン」がおすすめ。
800 倍で葉面散布又は灌水

（2頁からの続き→）さらに与えた肥料が多すぎて“根いたみ”を起こしている場合などは「エヌトール」を使用し、培養土のチッ素分をすみやかに除去しないと、極度の生育不良に陥る場合があります。
この状態は「エヌトール」で培養土の肥料除去後「P.K. マグ」で茎葉の持っているチッ素分の消化を促します。

追い込みの方法
（500 倍～1000 倍）

9 月 15 日までに終了

追い込み肥

「止め肥」後の 9 月上旬に行います。
液肥を使用するのが普通です。（みらい、アミノＰＫなど）
使用倍率は通常の使用倍率でよいと考えます。
与え方の特徴は短期間に連続与えることです。
与え方の一例は、最初は 2 日間続けて与え、その後は 1 日間隔で 3 ～ 5 回くらい与えます。
遅くも 9 月 15 日までに終了します。
さらに葉が巻き込むなどの症状が現れるまで追い込みと、後の肥料調整が大変になります。
茎葉の状態を見ながら途中で中止することも大切です。

秋の肥料調整

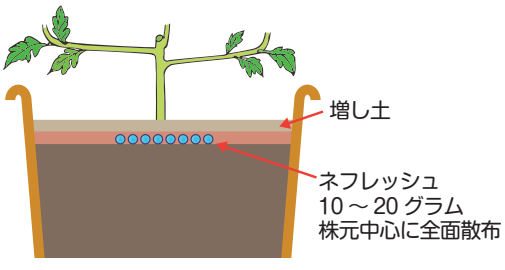
追肥終了後、9月15日頃からＰＫマグ10～15グラム（大サジ山一杯）を表土全体にバラまき、表土に土をかぶせる。増し土と同時でもよい。
2～3回行う。

肥　料　除　去

エヌトール500倍にうすめ9号鉢の場合2～3リットル掛け流す。
葉色が極端にドス黒い場合や巻き込んでいる場合、5～10分後、水3～5リットル掛け流す。
（水で洗い流す気持ちで）

秋の肥料調整及び肥料除去

追い込み終了後はチッ素過剰気味となっているのが普通です。茎葉の持っている過剰のチッ素分を消化させると、ともに土が保持しているチッ素分も吸い上げ同時に消化させ、花を咲かせる為の充実した木つくりをすることにあります。
その目的は、チッ素分を消化することで花形をととのえ、花弁を伸ばし大きな花を咲かせ、花のシミや花ぐされを出にくくすることにあります。
適正な肥料管理が出来ていれば、肥料調整剤（P.K. マグ）で充分に調整が可能ですが、培養土に多くのチッ素分を残している場合は、肥料調整剤のみでは開花に間に合わなくなってしまいます。
その場合は培養土の肥料除去を同時に行います。
こうしないといつまでも肥料を吸い上げてくる為、一向に肥料調整が終わらなくなってしまいます。肥料除去はエヌトールを使用しタップリと掛け流し鉢外に肥料分を流し落とします。



※水ゴケは外して増し土

※一度に乗せられる増し土は
1 センチくらい。

増し土

9 月中旬頃になると鉢土全体に根がまわり、表土まで上がってきます。また、花を咲かせる為の太い根が株元から発生します。
この根の伸びるスペースを作るのが増し土です。
増し土は大きな花を咲かせる為の重要な働きをする“力がある根”です。
9 月中旬から下旬に数回に分け 2 ～ 3 センチくらい増し土します。
増し土は一度に置ける量は1センチくらいです。
一度にまとめて乗せると土中に空気が入りにくくなり酸欠が発生し、“根いたみ”が発生することがありますので手抜きはできません。
また上根は翌年の冬至芽の発生を促す為にも重要です。

※　表土にネフレッシュを根元中心にバラまき、増し土すると上根の発生がよく活力ある根となります。

当社の土及び肥料を使用している方は最高の結果が生まれています。おすすめの資材です。

開花を早める“シェードコーン”在庫あります。お早めにお申し込み下さい。

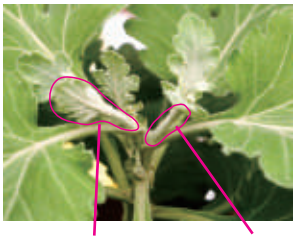
① 胴切り

芽先を「あずき」大に摘心し、側芽の発生を促す

注：支柱は外してあります。

② 摘芯後発生した側枝を立て直します。

一番上の側枝より、二番目又は三番目の側枝が強い場合が多いので、どちらかを芯に立て直す。（二番目に立替え）



注：支柱は外してあります。

③ 切り取った１番目の側枝

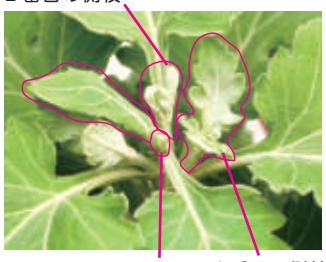
胴切り

芽先を摘み取り側芽に立て替えることです。
目的は「柳芽の発生防止」「三枝の高さをそろえやすくする」「草丈を伸ばす」「花形をよくする」「花形をそろえる」等々です。
胴切りの時期は定植から７～10 日後くらい。又は三枝が立ち上がって 10 ～ 20 センチくらいのつなぎ目の目立たない位置です。
高い位置で胴切りをすると、つなぎ目の上と下の葉の大きさがそろわない為、美しい盆養の姿にならない。目立たない低い位置で摘芯するのが基本です。
摘み取る芽先の長さは２～３ セン以内が一般的です。
胴切りの際、天・地・人の高さの狂いを調整する場合がありますが、小さく摘む枝と大きく摘む枝とでは側枝の生長にちがいが発生します。（蕾を大きく摘む、小さく摘むの方法で高さの調整ができます）
結果的に高さはそろわなくなる場合があります。
摘み取る芽先の大きさは大きく変えることはしない方がよさそうです。※ 柳芽の出やすい品種、及び草勢の強い品種を中心に行います。

④ ２番目側枝と側枝の元の葉を一緒に支柱に固定する。

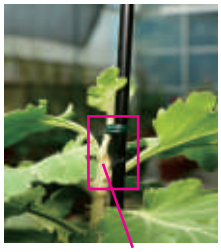
⑤ ３～４日後、側枝のみ支柱に固定しなおす。

柳芽の処理　２番目又は３番目の強い枝に立て直す。
１本の枝に発生しても、天・地・人、三本とも同じ位置で立て直す。
※胴切りと同じ方法で立替えます。



注：支柱は外してあります。

２番目に立替



伸びてきた側芽は徒長する為、うすいピーナイン（700～800倍）で散布します。

柳芽の処理方法

８月に入ると芽先に蕾状の芽がつくことがありますが、これが柳芽です。
これは本当の（花を咲かせる）蕾ではない為、見つけたら摘み取り側から出てきた側枝を芯（花を咲かせる枝）に立替えます。
柳芽は３本（天・地・人の枝）同時に発生することは少なく、１本の枝に発生したとしても３本とも立替えます。
こうしないと開花時期や花形がそろわなくなってしまいます。
立替えは柳葉のすぐ下の側芽に立替えるのではなく、2番目か３番目の枝に立替えます。

おすすめ資材

かがやき

機能性活力剤　１kg 入　￥3100（本体価格）

肥料の吸収及び消化を高め、肥料の効きめがよくなる、肥料残りも出にくくなる。
液肥と同じ倍率で混合して使用します。（500 ～1000 倍）

お申込み・お問い合せは
ウチダケミカルコーポレイション
Tel.029-869-1777　Fax.029-869-1666
〒300-4204　茨城県つくば市作谷1711-12　郵便振替　00820−6−96628